第四章　習俗・芸能と女性

第一節　習　俗

第二節　芸　能

第三節　わらべうた

第四章　習俗・芸能と女性

第一節　習　俗

一　お産にかかわる習俗と伝承

（一）はじめに

昭和三十年代からの急激な産業化、都市化の過程における人々の生活の変化は、出産にかかわる習俗に大きな影響をおよぼしました。

自宅分娩から施設分娩へと推移しお産革命という言葉が流行しました。

こうした変革の中で、出産の本来的なあり方である自然分娩が行われていた当時の習俗や、伝承されてきた通過儀礼を確かめておくことは、意義のあることと考え聞きとり調査を行いました。

（二）岐阜近郊の言い伝え

岐阜近郊の産育に関する諺、語彙の中には、現在もなお伝承されている事柄が多いのに驚かされます。

妊娠、出産、育児の各段階ごとに、多くの禁忌や作法儀礼が行われており「なぜ、このような非科学的な迷信や禁忌を信じたり、封建的な義理人情を大事に守ってきたのだろうか」と思う反面、一口に非科学的と断定できない要素があるのではないかと思いました。重要なのは、そうした個々の可、不可の点にあるのではなく、今とは違った先代先々代の暮らし方があったことを知り、世代から世代へと続いた暮らしが言葉にも物の考え方にも残って今があるということです。

妊娠及び出産に関するもの

・初卵を飲むとお産が軽い。

・子安明神を祈願し、護符を腹帯の中に入れる。

・水神さま、荒神様（火之神）や箒を大切にすると安産。

・妊娠中かいがいしく働くと安産。

・塩釜さまの守り札を受けると安産。

・戌の日に腹帯をしめると安産。

・魔除けに鏡を入れる。

帯祝い

・五ヶ月目の戌の日に神前に供えた紅白の腹帯（七尺五寸三分）を産婆さんに巻いてもらう。里から紅白の餅を一飾りずつ親戚に配る。

妊娠の心得と胎教

・妊娠中に火事を見ると子どもに赤アザ、葬式を見ると黒アザができる。懐中に鏡を入れていれば防げる。

・高い所へ手を挙げたり、重いものを持たない。

・妊娠中ころぶと臍帯が首にまく。

・妊娠中便所の掃除をすると産が軽く、美しい子が生まれる。

・立派な人の写真を常に見て日頃の自分の行いを省みるとよい。読書をすると胎児も本を読むことが好きになる。

妊娠中の食物、禁忌

・あわびを食べると目の美しい子が生まれる。

・こんぶを食べると髪の黒い子が生まれる。

・妊娠中に牛肉や油気の多いものを食べると子どもに胎毒が多い。

・四つ足のけものの肉を食べるとたたりがある。

妊娠に関する俗信

・腹がとがっていると男、平らであると女という。

・妊婦の顔つきがきついと男、やさしいと女。

産屋

・神様の祀ってない部屋を選ぶ。

・産室は納戸を充てる。

・産室には、ござを敷き、その上にむしろ半畳に灰を沢山入れて作った布団を敷いてその上で産む。

・神仏やクドから遠ざかった北の間、奥の間を使う。

・はじめてのお産は里方に帰る。

分娩

・明きの方へ（恵方）向かって出産する。

・灰を入れた袋の上にむしろを敷いて座り出産した。

・その年の干支に向かって位置を定める。

・産後十五日間は頭髪を梳かない。梳くと血がのぼる。

胎盤

・お墓に穴を掘って埋める。

臍の緒

・落ちると紙に包んで、生年月日を書いて保存する。

・臍の緒を大切に保存して死んだ時生き返ってこないように棺の中に入れる。

・美濃紙にきれいに包んでしまっておく。その子が重病にかかったとき煎じて飲ませると治るという。

・男の子であったら家を建てる時、その臍の緒を大黒柱の基の所へ埋める。これは、その子が盛んになるためという。

・女の子は、箪笥の底に入れておく。

産湯

・産湯は、初めは汚れているので、桶に産湯を入れて墓に持って行って埋め、二日目からは、お日様の少しもあたらない木の陰に穴を掘って捨てる。

・産湯を沸かす時に、漆塗りのものを何か一つ火にくべると、その子が一生漆にかぶれない。

産婦の食物、禁忌

・芋茎とするめを煮物にして食べる。産後の古血がよく取れる。

・梨、柿は産後食べてはいけない。

乳付けと母乳

・鯉、なまず、味噌汁の中へ餅を入れたのを食べると乳が多くなる。

・余った乳は、南天の木の下におさめる。

・熱い塩湯にタオルをつけて、それをしぼって乳をもむと沢山出る。

・餅やうどんは乳が出る。

産着

・麻の葉の柄の着物を着せると丈夫に育つ。

・帯で着物を作ると「締める」といってきらわれる。

（三）妊娠、出産の通過儀礼

岐阜地方で妊娠、妊婦を称する言葉に「ミモチになった、デキタ、デキテル」ともいった。妊娠の兆候は「ツキノモン（月の物）が止まっちゃ

母と子（大正時代）

う」ことから判断しました。腹が大きくなって、隠せなくなってから姑や夫に告げることもありましたが、昔は実家の母に報告して、婚家へ手土産持参で「よろしく頼みます」と挨拶に来ていました。嫁が姑に自ら言い出すことは労働を軽減してもらいたいとの意図のように受け取られることを恐れ、里の母からうまく取りなしてもらい暗にご機嫌を取っておく風習がありました。

また、「つわり」がはじまると、里方の母親は赤飯を婚家に持参し「できましたからよろしく」と頼みました。これをタノミノコワイ（頼みの強飯）と呼びました。

妊娠イツツキメ（五月目）の戌の日に帯祝いをしました。長子のときだけ里方の母親は「七五三」といって長さ七尺五寸三分の紅白オコン（うこん色・魔除け）三色の木綿を水引で結びシラガ（白麻）をつけ赤飯をふかし、鯉節をつけて持ってきたものです。一般的には紅白の餅を婚家の親戚、近所に配り「帯祝い」を行いました。大正初期の頃から岐阜地方の腹帯は大体紅白二色になり現在は形ばかりの紅色布がそえられるようになりました。

最初の子は里方で産むのが一般的で、予定の半月前に里に帰り、産後おおよそ一ヶ月くらいまでは里方に泊まります。しかし、三ヶ月にまたがると縁起が悪いといって一度婚家に帰ったり、親戚の家に一晩泊まってから里に帰りました。

出産は、潮の満ち干きと関係があるとされ「満ち潮でなけりゃ生まれねえもんだ」といいました。暦をめくり「上げ潮は何時だから、何時頃に生まれる」などと判断しました。トリアゲババサ（産婆）も心得たもので産が長引くと産婦がいかに苦しんでいようと、それを口実にして一服していたといいます。

七日目の七夜祝いには、産婆が新生児を抱いて正面に座り、近い親戚や知人が集まります。こうした七夜祝いは里方で簡単に済ませます。婚家では嫁と子どもが帰って来たら改めて七夜の祝いをします。この席で名披露をし半紙に名前を書いて鴨居に張ります。婚家に帰って来てからの七夜祝いは県下のほとんどの地域で今も伝承されています。

宮参りは男子は三十一日、女子は三十日になると姑は嫁の実家から届けられた産着を子どもにはおらせて宮参りをします。

（四）おわりに

伝承されてきた妊婦の心得は、仏教的禁忌や不作法や不浄な行為を戒めるものが多くあります。

即ち、妊婦の行動上の禁忌（これこれはしてはならぬ）、妊婦の食生活上の禁忌（不食の戒め）の二点に要約されます。両方とも禁忌を破ると胎児の成長、新生児の生育状況に悪い影響が現れてくるというように、その結果を新生児側に置く形をとっています。妊婦の行動が、新生児の身体に異常となって現れるからそのようなことはしてはならないと戒め

られていたのでしょう。

二　結　婚

（一）昭和初期の結婚

結婚適齢期になると、資産や家柄などのつり合いを考え知人が相手を紹介し、結婚が成り立っていきました。

紹介されて両家が気に入れば見合いという段取りになります。見合いは、女性が見られる、男性は見る立場をとりました。町角で男性が待っていてそこを女性が通り過ぎ、大体の風貌をつかんだり、女性の家に行ってお茶を一服出してもらって互いに話をすることもなく、大体の容姿をつかむという形式がとられていました。

両方の親が気に入れば、仲人を立て、親同士によって結納、結婚へと話が進められていきます。

見合いから結婚まで一度も逢うこともなく手紙一通交わすわけでもなく、結婚してしまうことが当たり前とされていました。交通の便もよくない頃なので仕方がありません。

このことから考えても、この頃は本人同士の意思が尊重された結びつきより、家と家との結びつきが重視されていたのです。

親の反対を押し切り好き同士が一緒になったならば、親から勘当されたり恋愛したなどと評判になったりしました。

昭和10年頃の結婚式

（二）嫁入りの準備

女の一生は、結婚によって大きく左右されます。娘を持つ親はだれでも「自分の娘をいい所に嫁に出したい」「沢山持たせていい所へもらってもらいたい」という気持ちを持って最大の努力をするものです。

十代も後半になると嫁入り仕度をはじめます。一度に用意するのは大変だからという気配りから、着物を一枚ずつ用意していくのです。

戦前まだ物が豊富であった頃は、嫁入り衣装を揃えるのに結婚してから一生着るものに困ることのないようにとたくさんの着物類を用意しました。呉服屋さんに家に持って来てもらい色々と選びました。これも家庭の経済状態と相談して女親のふところ次第で決まりました。養蚕農家では、家でとれた繭を糸にひき色染めし、反物に織り一枚ずつ着物を作りました。色々の柄を工夫し、布に織っていくのは女親の楽しみでもありました。

戦時中の物資のない時は、農家は食料を着物に交換したり、母親の着物を縫い直したり、知り合いの織元で直接買ったりと結婚のために衣裳を調えるのに女親は四苦八苦しました。

一方、女の子は「嫁に出す子だから」「よそ様にもらってもらう子だから」と躾も厳しく、外に出しても恥ずかしくない子に育てようとしました。

（三）結婚式・披露宴

結婚式の当日の午前中に荷造りをします。荷が新郎の家に運び込まれると荷物は座敷に飾り、近所の人や親戚の人に披露し衣裳まで見せます。

里帰りの時「沢山持って来ていただいて」と嫁ぎ先の姑に挨拶されて女親は気分が良くなるものです。

いよいよ結婚式が終わり披露宴が行われます。披露宴は嫁方の父親、親戚の人が出ることもありますが、ほとんど婿方の親戚、隣近所の人が呼ばれ、遅くまで酒を飲んで歌い結婚を祝いました。披露宴の御馳走は、婿方の親戚の女子衆がほとんど作りました。お勝手元は大変でした。

料理の献立表が台所に貼られ、女子衆で分担され順次作っていきました。

昭和初期の献立表によりますと

祝　魚　（数の子、田作り、黒豆）
御　平　（長芋、板、こうたけ）
ちょうく（いか、竹の子、大根）
なます　（生鮪、紅梅、切りこんぶ、鶴のかまぼこ）
吸　物　（鯉、白みそ、ふきのとう、うど）
吸　物　（蛤、うど）
刺　身　（ふな）
大　引　（林檎、れんこん、巻卵、えび、にぎり卵）
煮　魚　（ぶり、大根花切り）
塩　焼　（鯛、うど）
茶碗蒸し（ぎんなん、椎茸、板、かしわ、栗、長芋）
酢の物　（たこ、胡瓜、針生姜）
す　し　（巻ずし、にぎりずし）
大　汁　（豆腐、みつば）
鉢　盛　（里芋、こんにゃく、ごぼう、れんこん、うづら豆、人参、ちくわ）
籠引き　（ぼら、うど、蛤、板、林檎）

膨大な御馳走で客の接待をしました。

裏方にまわる女子衆は大変な忙しさでした。披露宴の後手伝いや給仕をした人達の労をねぎらい「後座敷」を設けました。この時は家の人が給仕などをしました。

嫁入りの昔話

昔、持田のある娘が隣の須衛へ嫁入りすることになりました。親戚の人達に送られ、箪笥や長持ちなどと共に行列を作り日暮れに出発しました。

両親は娘にこまごまと言い聞かせて送り出しましたが、行列が一服している間に年端もいかない花嫁は、話し相手もなく不安で悲しくなってしまいました。

休憩も終わり、出発しようと声をかけましたが花嫁はいやと云い座り込んだままで、強情にだだをこねるので近所の衆も親戚の人も怒って花嫁と道具を置いたまま帰ってしまいました。翌朝空の白みかけた頃見に行くと、花嫁は大きな牛の岩に、また箪笥や長持ちもそのままの形の岩に変わっていたそうです。それ以来、この辺りを牛倉と云うようになりました。

三　葬　送

人が亡くなると葬式の「おとりもち」の相談のため、一統（内輪）が集まります。本家筋の人を中心に相談し、役割を大きな紙に書いて張り出し、それぞれの分担に応じて準備に取りかかります。

葬式触れ（死去触れ）　二人一組で行きます。昔は歩いて行くことが多かったので、家紋入りの提灯を持って行きました。岐阜や関、犬山や江南の辺りまで自転車で行ったといいます。

家の神棚には白い紙か布で覆いました。

通夜　亡くなるとすぐ僧に来てもらい、枕経をあげてもらいます。北の間に北枕にして寝かせ、魔除けの刃物（刀か、かみそり）をおき、枕元にしきび一本、線香一本立てて終夜火を絶やさないようにし、湯呑みに水を入れておきます。近い親戚だけでお通夜をしました。

湯缶・納棺　湯缶は身内の者が揃ってから始めました。服装は浴衣を着て荒縄でたすきを掛けて洗います。たらいに湯を汲み、行水をさせるようにして洗いました。棺は座棺で、納棺は晒しで身内の者が白衣を縫い（この時は糸のこぶはしません）着せました。

お斎　参列者全員に振る舞うので、お斎の用意や接待は一番大変な仕事でした。主に女子衆が受け持ち、準備から後片付けまで大仕事でした。野菜を洗ったり、お米や食材や食器の用意をしたり、材料を切ったり前日から準備をします。ご飯方、汁方、膳方、給仕方、皿盛、洗いまわしなどに分担して仕事をします。

お斎は、生前お世話になったので振る舞うという意味があり、家々の主婦や老人たちはその日のために、普段からやりくりして米、味噌、醤油、薪、数十人分の食器、炊事用具などを生前から準備していました。

当日は朝早くから集まり、クド（かまど）の用意をしてハソリでご飯と汁を作ります。お勝手の外のクドで薪を使って炊きました。汁は白味噌で砂糖を入れます。「五つ盛」はれんこん、こんにゃく、人参、角麩と決まっており、真ん中に蜜柑か林檎などを加え色取りにしました。酢のものは、夏は胡瓜と焼麩、冬は大根のなますが普通でした。皿盛につけ合わせ、お膳に用意して大棚に何段も並べておきます。

お斎に使うお膳、汁手桶（木の桶）、汁碗、大輪の椀（ご飯をつける）、クド、ハソリ（一斗炊き、二斗炊き等大量に炊く釜、ご飯用・汁用とあった）など組で共用用具として持っていました。其の他各家でも湯呑みや皿、茶碗などの数十人分の食器や座布団など、この日のために用意していました。

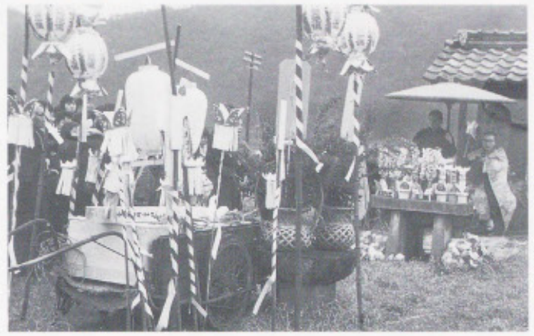
葬式の始まる前の十一時頃から、参列者全員にお斎をふるまい、お膳を出したり、給仕をしたり、お膳を引き又新しいお膳を運ぶやら裏方の仕事は女子衆の大事な仕事でした。

香典　香典係が受け取って香典帳に記入します。香典帳は半紙を二つ折りにして、普通とは逆にしてこよりで綴じ合わせ、表紙に死去の日付、没年齢、俗名など書きます。普通香典で葬式の費用はまかなえたといいます。

葬式　寺方の僧の式で死者は仏様の弟子となるといわれています。焼香は喪主、身内、親戚、一般の弔問客の順に行います。親戚の人々は男は黒紋付き、女は白無垢を着ました。

野辺送り　葬列は決まった順に並んで家を出発します。野道具はおと

野辺送り（三ツ池町）



りもちの中で器用な人がほとんど作りましたが、難しいものは岐阜や犬山まで歩いて買いに行ったものです。

埋葬　昔はほとんど土葬でした。墓穴は葬式の前日に掘りました。「穴掘り方」はおとりもちの中でも重要な仕事で、現場へは酒の外御馳走を何度も運び其の労をねぎらいました。棺は座棺で墓穴の底に筵を敷き棺を入れ、一人ずつ石を拾って入れ土をかぶせて木の墓標を立てました。

帰宅後　人々が野辺送りから帰ると、家の前で塩をまきケガレを清め、たらいに水を汲み足を洗いました。そしてご苦労様でしたと、ぼたもちを振る舞いました。

夜はおとりもちをしてくれた人々の労をねぎらい、身内の者が夕飯の用意をしました。おとりもちの人々は夕飯をよばれ、引き出物やお供えのお下がりなどもらって引き揚げます。

翌日は故人の着物を身内の女子衆が洗い北向きに干します。そのあとお墓に参り、お寺へも身内だけでお参りします。

時は移り時代が変わって近頃は葬送も簡略化されてきています。死去触れも遠くは電話で済ませ、土葬が火葬に変わり、墓掘役もなくなり野辺送りも簡単になりました。お斎のご飯も料理も外注で済ませ、本当に簡単になりました。その昔はすべて手作りで、しきたり通りにする飲食の世話は、準備から後片付けまで女子衆の大きな仕事だったのです。

四　法　事

法事の催し方について

故人の冥福を祈って供養する行事は古くから親戚、家族が中心となり行われてきました。時代の流れと共にその行事の催し方も変わって来ました。

私の生家は本家をもとに分家があり同じ苗字を名乗る親戚が近くで農業を営み生活をしていました。そんな農家の戦前戦後（昭和十～三十年代）に行われた仏式の法事について記します。

人が亡くなると初七日、二七日と七日目毎に僧侶を招き経をあげてもらい故人の供養をします。本願寺では三十五日目まで、禅宗では四十九日まで行います。それぞれの最後の日には、親戚身内が集まり僧侶を招き経をあげ食事を共にし墓参り、寺参りをして、三十五日、四十九日の法事をつとめます。

以後、翌年の法事を一周忌として営み、その翌年を三回忌として、七回忌、十三回忌、十七回忌、二十三回忌、二十七回忌、三十三回忌……と最後を五十年祭としてつとめます。

食事のもてなし方は、現在のように仕出し屋や料理屋の手を借りるのではなく、近親者の女子衆の労力を借りながら料理作りをします。「親の法事このとき」といわれるように前日からお手伝いをし、もてなしに一生懸命力を注ぎます。男の人たちは客として座敷に座るのです。

法事の時の献立は大体どの時も献立が決まっておりました。

汁碗　湯葉、椎茸、麩の吸い物

おつぼ　煮豆

お平　飛竜頭（ひじき等のはいった厚揚げ）

五寸鉢物　煮なます

六寸皿　七つ盛

七つ盛には角麩、こんにゃく、蓮根、こも豆腐、長芋、ごぼうの煮つけそれに果物をもりつけ七種のものを盛ります。いずれも材料は大きく姿よく切って、果物を真ん中にして回りに一つずつ盛りつけます。

七つ盛は、夏は餡なし秋冬は餡入りの落雁を代用する場合もありました。

このほか、鉢物を用意し、随時とって食べられるように取り皿の用意もしました。

鉢物の例　おしたし、里芋の煮つけ、こんにゃくの煮つけ、うずら豆の煮物

なお、引き物として落雁の篭引きを菓子屋に注文して加える家もありました。分家で行う場合は、本家から本膳、食器類を借りて使ったものでした。

昔は法事を俗に、鍋かりといい現在のようにお金を使わない行事でありました。お詣りに行く親戚縁者も重箱に米一杯（約一升）のお供物かお金で今のような多額ではありませんでした。

食事の準備

三十五日又は四十九日の法事には、近い親戚が、ぼた餅をおひつに入れて持って来て供えてそれを客に振舞ったものでした。

お詣りするものの服装は女の人はよそ行きの着物に紋付きの羽織、単なる外出着の人もありました。男の人は外出着でした。

第二節　芸　能

花嫁修業

女性の教養として身につけたい芸能に茶の湯、生け花があります。茶の湯、生け花は明治維新以後、新時代に順応し大衆化することにより発展してきました。

特に、日清・日露戦争を機に復古的気運が高まり良妻賢母の養成を目指しました。そのための教養として、茶の湯・生け花は、裁縫と共に女性のたしなみごととしてめざましい発展普及を遂げました。それは女学校の教育内容に盛り込まれ女性には必修のものでした。茶の湯は「和室での立ち居振るまい方を知る」「お点前のけいこをする」「一服のお茶をいただく」など礼儀作法として実用的なものであります。また、心に落ち着きを持たせる精神面での修業でもあります。

また、生け花は花のたて方、さし方を学び、住宅様式・生活様式に即応した生け花を生けることが出来るようにします。和室の床の間に置かれた一杯の花、テーブルの上に置かれた一杯の花で落ち着いた雰囲気が醸し出され心を和ませてくれるものです。

女性にとってこうした教養を身につけることは大切なこととして結婚前には、その道に堪能な師匠について学びました。花嫁道具の中には、必ず花器の一式、茶器の諸道具が含まれていました。

現代では、茶の湯も生け花も住宅様式や生活習慣の変化に伴い、花嫁修業的なものから脱皮して、生活を楽しむ趣味として年齢を問わず、現代生活の中に浸透しつつあります。

茶の湯の心

昭和二十年代頃までは結婚式は家庭で行われていました。三・三・九度の盃は小学生ぐらいの女の子が二人か三人で行うのでした。

親戚に結婚式があると招待され、その儀式に参加します。緊張した雰囲気の中で行われる儀式ですから間違いがあってはいけないのです。

「畳のへりは踏まないようにして、畳の短い方は三足で歩くのよ」

「畳の長い方は六足で」

「頭を下げる時は、一、二、三ぐらい数えて上げるのよ」

「手は横におき、足は内またで歩くのよ」

などと結婚式二、三日前から座敷で特訓が行われます。

大正、昭和初期に娘時代を過ごし、茶道をマスターしてきた母やおば様方は、和室での作法に自信を持って居られ厳しく教えて下さいます。何度も何度も練習して自信をもって本番に臨むのです。

やがて、そんな私も娘時代を迎え、花嫁修業をしなければならない年頃を迎えました。和裁、洋裁、編み物、生け花それにお茶、これが昭和三十年代の花嫁修業の内容でした。

この道に堪能なお師匠さんの所へ曜日を決めて習いにいきました。この中で一番実用性に乏しいのがお茶でした。

「なぜ、形式ばったことをするのか」という疑問を持ちながら、足がしびれるのを我慢して続けていきました。そのうち長く座っていても足はしびれなくなりました。

一服のお茶をいただく、お点前のけいこをする、そして礼儀を知ることにより落ち着いた気分に浸ることが出来ます。これが魅力の一つになりました。

日常生活の中、動の生活が多く、心を引き締めてゆったりした気分に浸ることの少ない私にとって、茶の湯をする時は幸せのひとときでありました。

花嫁修業として短期間の茶道の勉強でしたが、お茶を習うようになってから、おしゃべりは出来ても人前で挨拶は出来なかったのに、いつか目上の人に対してごく自然に挨拶が出来、和室での立ち回りが自然な形で出来るようになりました。

また、床の間の花や、掛け物、器などにも興味を持つことが出来るようになり世界が広くなりました。

今では、幼い頃結婚式のために躾られた和室での作法も身につき、和服を着るとその作法が自然に出来、生活の中に生かされています。よその家に訪問した時、玄関で座って迎えられると、何故か落ち着いた気分になるものです。

「心をこめて客をもてなす」「客もその心を喜んで受ける」この茶の湯の心が私たちの生活の色々の面に生かされ豊かな人間関係が生まれるものと思います。

花との出会い

各務原市も平成十一年五月、茶華道連盟が結成発足し、同時に華展も開催されることになりました。

振り返ってみますと、昭和三十三年頃は、世の中も少し落ち着いてきて、婦人の地位も次第に向上してきました。

その頃婦人会で、「わたし達の身につく活動をしたら」という声が出て、早速役員会で討議の結果、「生け花クラブ」を作ることに決まりました。

生け花の展示会

さいわい近くの那加町にお花の先生がおられることを聞き、お願いし心よく承諾していただき発足となりました。月二回、第二・第四の金曜日夜七時から、「小佐野生け花同好会」の名称でスタートしました。

当時は、現在のように各所に公民館、福祉センターはなく、味噌蔵の隣にある小さな公会堂、庵主様が裁縫を教えておられる普門庵などをお借りしました。

みすぼらしい八畳に二十ワットの裸電球が一つついているだけで、その灯りを頼りに生け花の稽古をしました。それが当時の自然の生活の姿でした。

生花、盛り花、投げ入れなどを習いました。クラブの人々も花との出会い、友人とのふれあいによって時間の過ぎるのも忘れ楽しい時を過ごしました。

講師の先生は常に、「一輪の花の命の尊さを大切に」と、花の優しさ美しさを教えて下さいました。年々生け花クラブもあちこちにできて、市内ではサークルの数が二十余りに増えました。

時は流れて、各務原市もめざましい発展を続け、いろいろの文化活動も盛んになってきました。

二十周年、四十周年、又先生の古稀の祝と、華展を開催し、盛大に祝福もしました。

「花を弄ずれば香り花に満つ」の言葉のように、十年、二十年となれば生け花の稽古は、一日のリズムとなって花への愛着は益々深くなりました。

五百有余年の歴史を重ねてきた池坊、時代の変化と共に、生け花の姿、形も変わり続けています。

わたし達も恩師のご他界を機に解散し、現在はそれぞれの生け花の道に励み、新世紀を迎えました。過ぎたる日々を懐古し、人間として花を愛し、生け花を通して時代を振り返り、花一筋の道を大切に生きています。又、日本の伝統文化を若い世代に伝えるために、指導に当たっている昨今です。

農の生け花

花の無い毎日の生活ほどわびしく貧しいものはございません。わたし達は身近に花を置く事によって生命をうるおし生活を豊かにする事が出来ます。それはお金をかけた花でなくとも草の実でも木の葉でも生きていて自然の息吹を伝えてくれるものであったなら何でもよいものでございます。その花こそは「翠邦会」横井友詩枝先生が信念と希望を持って創意工夫され生け花の上に農の一字をつけられて「農の生け花」として国内は勿論の事、海外までも広く親しまれている花だと思います。

わたしの「農の生け花」との出会いはたしか昭和四十一年頃の雨の日だったと覚えております。主人が読んでいた「家の光」を置いて電話に立った時、私がその本を手にして頁をめくって居りましたら未だかつて見た事も聞いた事もない写真が目に止まったのです。野菜や草花を素材にした不思議な生け花が載っているのです。これは面白いものがと読みましてあくる日に真似をして生けてみたのが、わたしの農の生け花の始まりでございます。

生け花とは流派に従って決まった形に教えられていたわたしですが、その「家の光」に載っていた花には何か胸に深く焼きつくものがございました。皆様もご承知の通り我が各務原市の農業は、現在短根人参が主な生産物ですが二十年前は養蚕の全盛時代でした。そんなある日に市の養蚕婦人部の総会が鵜沼支店で行われた時の事でございます。開会間際になって会場に花のない淋しさにふと思い立ちましたわたしは早速我が家の畑に飛んでいってトウモロコシを五、六本と高山線の土手で草花を折ってきて会場の隅にあった花器に無造作にたてました。その日は県より来賓として出席くださいました蚕糸課長様がその花がお気に入って頂けましたとみえ、御祝詞の折りに「今日の生け花こそは何にも勝る農村婦人の心の花だ。何事もこの心がけで大いに頑張ってほしい」と思いもよらないお言葉に役員の皆さんにも大変に喜ばれまして、恥ずかしさも忘れて気をよくしたわたしは益々農の生け花に心を寄せていったのでございます。

それから農協婦人部の「家の光」大会や年度末総会には何時も木の葉や季節の農産物等を生けて皆さんに笑って頂いてまいりました。

横井先生は農の生け花は「農家の皆様なればこそのもの」との強い信念のもとに稲穂や麦は勿論野菜の葉も花も草花も雑草も素材にお使いになって、生け花作品集として「実りと花と土、そして心」等色々の本を出版され、海外へは英文にして送られています。ご自分でどこへでも足を運ばれてご指導になり、外国との親善に終戦直後から生け花を持って随分とご活躍されました。

生涯を農の生け花に捧げて居られる先生に一度はお目にかかれたらと思っていましたところ、平成元年二月愛知県東知多農協で「農の生け花愛好会第一回全国集会」が開かれました。わたしも家族みんなに勧められて出席し、先生の講義やご指導を受けることが出来長年の望みが叶えられました。農の生け花はどこへ飾ろうとかまわないと先生は申されます。わたしも花材によっては家の中にも生けますし、農作業場でも素材を見つけては時折生けます。早朝からの人参収穫の時、箱詰めの作業の休みの時に自分で作った農産物や道端で見つけた草花を民具や農具に生けた農の花を眺めながら、嫁の入れてくれた一服のお茶を頂くときが一番幸せを感じます。

第三節　わらべうた

わらべ歌は、昔から子供の間で、歌われ歌いつがれてきました。それは縄とびの歌や、手鞠歌、お手玉遊びの歌であり、わらべ歌を歌いながら遊んだ少女時代が、なつかしい思い出となって蘇ってきます。

昭和の初期は、ほんとうにのんびりしていて、お宮の境内や、空き地が、子供達の楽園でした。その遊び場には、絣（かすり）の着物にお下げ髪、わら草履の近所の仲よしが、子守をしながら集まって遊び、明るい笑い声があたりにこだまして聞こえてきました。

その頃の暮らしは決して豊かでなく、親達は畑仕事や、家業に忙しく、猫の手も借りたい程でしたので、子供達も学校から帰るとすぐ畑や家事の手伝いをしたり、幼い弟妹の子守をしました。大きい子も、小さい子も、仲よく一緒になってお宮の境内で、色々の遊びを工夫しながら楽しい遊びを覚えていきました。男の子は、ベーゴマの競争や、戦争ごっこや、ビー玉遊び、女の子はお手玉、おはじき、縄とび、又男の子と一緒になって、陣取りをして、暗くなるまで遊んだ事が、昨日のようになつかしく思い出されます。夜は裸電球の下で、両親から昔話を聞いたり、わらべ歌を教えて頂いたりしたのをおぼえています。

わらべ歌は、ずっと古いものから比較的新しいものまであって、それぞれ飾り気がなく、その時代の暮らしや、遊びと結びついているようです。最近あまりきかれなくなりましたが、今でもわらべ歌を口ずさむと不思議に、心のぬくもりが伝わってきます。

わたしたちが幼い時、母やおばあさんに教えてもらい幼友達と手まりをついて遊んだり、お手玉手合わせして一緒に歌ってきたものを思い出し書き留めました。

一でランラン（手まり歌）

一でランラン　らっきょ食ってシッシ
しんがらもちゃ　キャッキャッ
キャベツで　ホイ

二でランラン　らっきょ食ってシッシ
しんがらもちゃ　キャッキャッ
キャベツでホイ

ゆうびんやさん（縄とび歌）

ゆうびんやさん　ゆうびんやさん
もうかれこれ　十二時だ
えっさか　もっさか　走りやんせ

ゆうびんやさん　おはいりな
もうかれこれ　十二時だ
えっさかもっさか　お出なさい

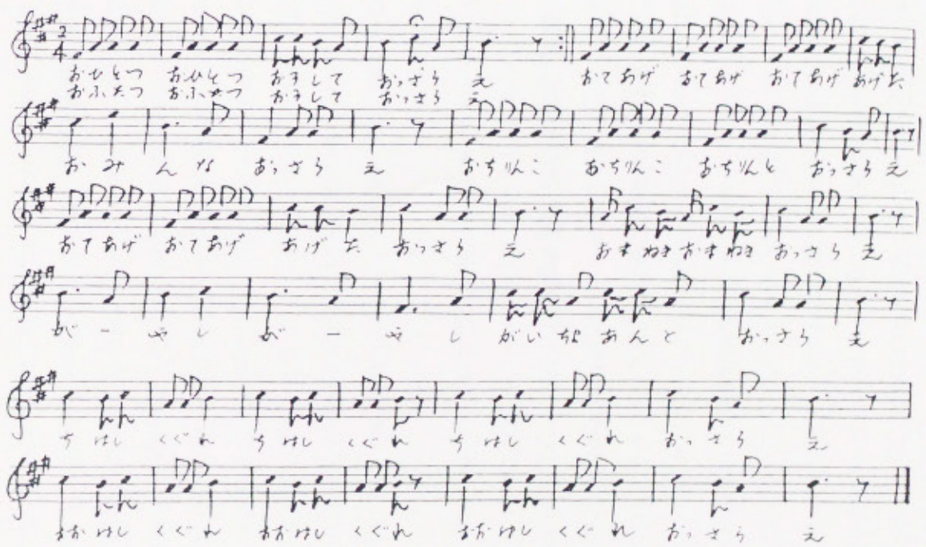
一番はじめは（手まり歌）

一番はじめは一の宮　二は日光東照宮
三は佐倉の宗五郎　四は信濃の善光寺
五つ出雲の大社　六つは村々鎮守さま
七つ成田の不動さま　八つ八幡の八幡宮
九つ高野の弘法さん　十は東京二重橋
あれほど心願かけたのに
浪子の病はなおらんか
ゴーゴーゴーと行く汽車は
武男と浪子の泣き別れ
二度と会えない汽車の窓
泣いて血を吐くほととぎす

おひとつおろして（お手玉歌）

おひとつ　おひとつ　おろしておっさらえ
おふたつ　おふたつ　おろしておっさらえ
お手あげ　お手あげ　お手あげ　あげた
おみんな　おっさらえ
おちりんこ　おちりんこ　おちりんこ　おっさらえ
お手あげ　お手あげ　あげた　おっさらえ
おまねき　おまねき　おっさらえ

おひとつおろして



一かけ二かけ三かけて（お手玉・縄とび・手合わせ）

一かけ二かけ三かけて
四かけ五かけて橋をかけ
橋のらんかん　腰をかけ
はるか向こうを　眺むれば
十七、八のねえさんが
片手に花持ち　線香持ち
ねえさん、ねえさん　どこゆくの
私は　九州鹿児島の
西郷隆盛の　むすめです
明治十年戦争で　切腹なされた父上の
お墓参りにまいります
お墓の前では　手を合わせ
南無阿弥陀仏と　目に涙
参ったあとから　ゆうれいが
ふうわり　ふうわりと　出てきます

てんこてんこ（手合わせ歌）

一つひよこが　米にのって　てんこてんこ
二つ船頭さんが　舟に乗って　てんこてんこ
三つ皆さん　髪結って　てんこてんこ
四つ嫁さん　かんざしさして　てんこてんこ
五つ医者殿　薬箱　てんこてんこ
六つ昔は　よろいかぶとで　てんこてんこ
七つ泣く子にや　蜂がさして　てんこてんこ
八つ山には　うさぎが　てんこてんこ
九つこじきが　お椀持って　てんこてんこ
十　との殿　馬に乗って　てんこてんこ

坊さん坊さん（人あて鬼あそび）

坊さん坊さん　どこ行くの
わたしは田んぼへ　稲刈りに
わたしもいっしょに　つれてって
お前がくると　じゃまになる
かんかん坊主　くそ坊主
うしろの正面だあれ

つぼどん（たにし）

つぼどん　つぼどん
お彼岸まいりに　行こまいか
行きたいことは　行きたいが
カラスという　黒鳥が
足をつつき　目をつつく
それでわしは　よう参らん

まだまだわらべ歌は、その外たくさんあります。ここには一部の歌ですが、多くの子供達によって歌い継がれてきたものばかりです。

こうしてわらべ歌を、口ずさみながら、ペンを走らせておりますと、幼い頃遊んだ友達の顔や、静かな里の風景が目に浮かんできます。戦中、戦後は、ないないずくしの毎日を送っていましたが、暮らしぶりは貧しくても、今よりもっと元気で伸びやかだったように思われます。

やがて、戦後の社会、文化の変動により、子供達も少なからず影響を受けてきました。国が富み、物質的な豊かさにもなれてきた頃から、一番大切な心の豊かさ、温かさ、思いやりの心がとかく失われつつあるのは残念な事です。

ふる里の香りが一ぱいのわらべ歌は、懸命に生きてこられた先祖の大切な文化遺産だと思います。

第五章　生活と女性

第一節　衣生活
第二節　住生活
第三節　食生活

第五章　生活と女性

第一節　衣生活

一　大正・昭和初期の衣生活

大正に入り、人々の暮らしにもようやく自由の風が吹き込むようになりましたが、農村地域では、男性も女性も和服を多く着用していました。

一家の衣類の管理は女性の仕事でした。ひまな時期を見計らって家族の衣類の整理、準備をしました。傷んだ着物をほどき裾や袖口などの汚れを洗い落とし、板張りや伸子張りにしました。破れを繕い、仕立て直したり、仕立て直しのできなくなった着物を半天やでんちこ、子どもの着物に仕立て直すなどの工夫をしました。

洗い張りと伸子張り

昭和初期の嫁入り道具に欠くことのできなかったものに張り板と伸子張りの道具が挙げられます。着物が汚れたり悪くなると着物を仕立て直して用いることをしました。

着物をほぐしてばらばらにした長方形の布切れを、のりをうすめた水につけ、板に手際よく張りつけます。ところどころできた空気のつぶを押し出すようにしっかりと張りつけます。すっかり乾くと、それを隅からめくってとります。

板張りにするのは、木綿物が多く、銘仙などの絹織物は伸子張りにしました。伸子張りは、布をつないで長くし、ふのりの液に浸した後、両端を引っ張って伸ばし、七、八センチおきに伸子針で布幅を張りのばします。

天気のよい日に行うこの仕事は、女性にとって大変な仕事の一つでした。新品同様の気持ちのよくなった布を使って弱っているところは切り取ったり、汚れの落ちないところは目立たないところにしたり、親の着物は子どもの着るものに仕立て直したりするのは、女性の仕事でしたが楽しみでもありました。

衣生活を支える戦前の裁縫教育

家族の衣生活を支える女性は、結婚するまでには、どうしても裁縫ができなくてはなりませんでした。母親から教えられたり、見習うことは多かったと思いますが、尋常高等小学校、高等女学校、家庭の教育の中で裁縫が出来る力をつけることが重視されていたことがうかがえます。

尋常高等小学校

稲羽東小学校の不惕百年誌によりますと『明治十九年四月公布された「小学校令」で小学校は尋常科と高等科の二科で修業年限は各四ヶ年とし、六歳から十四歳までの八ケ年が学齢とされました。そして、父母、後見人等はその学齢児童に普通教育を受けさせなければならないと義務づけられました。学科についても示され、裁縫科は高等小学校に女子のみ受けさせるよう位置づけられました』と記されています。

高等女学校

大正末期から昭和初期の岐阜高等女学校の裁縫教科書「現代裁縫教科書」によりますと、多方面にわたった裁縫指導内容が盛り込まれています。

（一年）
- 本裁単衣女物・男物●中裁　小裁単衣　四ツ身　三ツ身　一ツ身
- 綿布の繕い方

（二年）
- 本裁袷女物　男物●中裁　小裁の袷　四ツ身　三ツ身　一ツ身
- 本裁綿入女物　男物　一ツ身綿入
- 本裁女袴　腹合帯

（三年）
- 本裁羽織●本裁綿入羽織●本裁袷羽織●本裁被布
- 中裁小裁綿入羽織●ミシン裁縫

（四年）
- 本裁単羽織　女物・男物●本裁男袴　本裁女小袖
- 丸帯●本裁コート

これらすべてを実際に作ったのではなく基本的なもの、実用的なものについて徹底した指導が行われたということです（昭和三年卒業生の言葉）。

高等女学校の教科書

運針練習は七十センチぐらいの白地木綿を二つ折りにし、赤い糸で二ミリぐらいの針目で縫う練習をしました。また、時間を決めて長くきれいに縫う練習を継続にしました。時には、縫う競争をし、長さと針目の美しさで評価されました。

単衣の着物を縫った後には、生地一反を用意し、一日がかりで早縫い競争をしたりして、確実な技術が身につくよう指導されたということです。

お針子さん

明治末期から昭和初期にかけて若い子から結婚間際の娘が裁縫師匠の所へ裁縫を習いに通い、生活に必要な着物等が縫えるようにしました。習いにいく人をお針子さんといいました。

各務村木戸の宇野志な様は師匠さんでした。各務村は勿論鵜沼村、蘇原村から裁縫を習いに来るお針子さんに明治の末期、大正、昭和の戦前まで師匠をされておられました。

また、稲羽地区は、織物の盛んな所でした。織姫さん達が仕事を終えてから夜遅くまで慈勝寺（松本町）の尼様のところへ裁縫を習いにいきました。

織り屋さんからお中元やお歳暮にもらった反物で着物や羽織を自分で仕立てて嫁入り仕度をしました。

昭和に入ると、人々はハイカラを好み動きやすい洋服を着る人もだんだん増えて来て生活のスタイルも変化してきました。更に昭和十年代には「洋裁を知らないと嫁にもらってもらえない」といわれるようになりました。その頃は、

お針子さん

既製服はほとんどなく布地を購入して家で作るか洋裁の堪能な人に頼んで作ってもらわなければなりませんでした。和裁にプラスして洋裁の技術を身につけなければならない時代でした。

この時代、洋裁教育一筋に生きられた方の手記を紹介します。

わたしの歩み（洋裁学校のあれこれ）

わたしの人生は、洋裁学校一辺倒の生活でした。大正二年八月に稲葉郡蘇原村三柿野野村で八人きょうだいの五女として生まれました。

わたしは昔の花嫁修業の女学校を卒業して、和裁、お茶、お花、琴などを一通り習っていましたが洋裁は全く無知でした。昭和十三年五月に結婚しました。夫は「これからの女性は洋裁が出来なければならない。洋裁の出来る人を育てよう」という考えから、わたしを名古屋の洋裁学校へ通わせてくれました。そして翌年の四月那加洋裁研究所を開設しました。当時は、洋裁の先生を頼もうとしてもありませんでした。幸い親類の方に大阪の文化洋裁学校を出られた方がありましたので二人で指導に当たりました。

そのかたわら、週二回洋裁の権威といわれていた小澤洋裁研究所で、流行の最先端の洋裁教育の指導を受け、春休み・夏休みには東京文化服装学院へ新鮮なセンスを採り入れるため講習に出掛けたり必死に研究を重ねました。当時、婦人の服装の著しい変化の時期に即応したせいか生徒が収容できなくなり、思い切って昭和十六年四月現在の場所に移転しました。六月に各種校として県下で最初の認可を受け、新校舎建築、昭和十八年四月より生徒数八十名ほどで授業を始めました。その後戦争のため昭和十九年四月より二十年十一月末まで休校しましたが、十二月一日再開することが出来ました。

戦後は入学希望者がどんどん増え、定員百六十名の所へ四百人申込みがあり廊下に机を並べ、二階にも拡げましたが先生が足りず困りました。クラスを昼間、夜間、日曜に分けて対応しましたが、休日が無く洋裁、洋裁で追いまくられました。その上、決まった教科書が無く講義内容は雑誌や東京の講習での資料などを参考にして作らなければなりませんでした。夜間の授業が九時に終わりそれから講義のための教材研究、資料作りと深夜まで頑張らなければならず苦しい毎日でした。この苦労も夫や周りの人に励まされ認められ教師としての自信につながっていきました。

流行の先端を行くため、昭和三十八年八月東京文化連鎖校として欧州研修旅行に参加、パリを中心に欧州モード界を視察、十ヶ国服飾界の民俗・風習を採り入れるよう勉強することが出来ました。昭和三十八年、那加文化洋裁学院と改称、五十四年夫を失い学院長を引き継ぎました。

五十五年余り、洋裁教育一筋に打ち込んできて八十八歳になった現在でも、ミシンの前に座ると何か縫いたいという意欲に駆り立てられるのです。

那加洋裁学校

近年、時代の流れと共に洋裁教育も変貌してきました。自分の歩んできた道を顧みますと、まさに時代の流れと共に歩んできた人生であったとしみじみ思います。

二　戦時中の衣生活

昭和十三年四月一日　国家総動員法が公布され、あらゆる経済活動・国民生活を戦争遂行の一点にふり向けるため国家による経済統制の強化を図ろうとしました。これによって消費物資の統制が強化され、国民の生活は、耐えを強いられることになりました。

衣料切符

政府は太平洋戦争勃発と共に統制経済（配給消費）などを具体化しました。昭和十七年二月繊維製品の配給消費統制規則を制定公布し実施しました。それにともなって衣料品の総合切符制度を実施しました。衣料切符は甲種と乙種に分けられ、乙種は市制施行の百八十三都市で、現在の各務原市に居住するものには甲種の衣料切符が支給されました。甲種は総点数八十点でした。その点数内で衣料品の購入が認められました。衣料品の点数は織物類二十三、和服類十五、洋服類三十五、朝鮮服類七、作業被服類十三、肌着及び身の回り品三十一、運動用品類七、家庭用品類二十三の計百五十四品目に細分化されていました。

衣料切符

しかし戦争の進展と共に、繊維製品の不足は厳しくなり一品に対する点数も多くなっていきました。それにともなって支給される点数も都市郡部を問わず一人当たり三十歳以上四十点、三十歳未満五十点と半減され、さらにタオル、靴下、足袋、縫糸などについては制限小切符を必要とするようになりました。靴下が二足、タオルが一本、縫い糸が十五匁（もんめ）、これが一年間一人あたりの配給量でした。

この制度は戦後も昭和二十五年、生産が回復するまで続けられました。

昭和十五年十一月以降、記された各務駒場の常会日誌によると、毎月常会が開かれ、配給品の分配の仕方が毎月のように記されています。

戦時中の家族の服装

三　戦後の衣生活

昭和二十五年に衣料の統制が廃止されるまで衣類を手に入れることは容易ではありませんでした。婦人会では生活改善の一環の事業として冠婚葬祭の簡素化を呼びかけ貸衣装を開始し結婚費用の節減に役立ちました。この時代の貸衣装の様子を書かれた文章を紹介します。

婦人会の花嫁衣装について

昭和二十九年各務の町会議員宇野志なさんが塚本町長さんに生活改善のため助成金をお願いされたところ、議会にかけられ三十万円頂ける事になり、花嫁衣装の貸し出しを始めました。最初は留袖、ゆたん、風呂敷を購入し、鵜沼第一、鵜沼第二、各務の三校区で管理する事にして、婦人会の人数が多い鵜沼第一校下の会長さん宅に衣装等をお預けし、会長さん宅で予約し、前日に借りに行くことにしました。それから三校区の会長さん宅に回り持ちとなり、そのうちに打掛、振袖等花嫁衣装を購入、男性用の羽織、袴、タキシード、モーニング等大抵の物は揃えました。その後、週一回火曜日を貸出の日と決め三校区の役員が交代で当番をしました。予約してある方の衣装を持って行き返して頂くと汚れた所をベンジン等できれいにしてアイロンをかけ、翌週持って行くので大抵は毎週出かけました。

やはりこうした物でもその年の流行みたいなものがあって、四月には新しい留袖など、四、五枚購入、白の打掛なども新しく加えました。

六月には全部出して総点検し、汚れのひどいものはクリーニングに出し、経費節約をと心がけ、重ね袴、比翼（ひよく）などは自分たちの手ではずして洗濯し、アイロンをかけてとじました。大変な労力でしたが三校下の役員総出でしました。

八月には衣装の展示会をして予約をして頂きました。こうして得たお金は利用者の多い少ないにより、指導員の先生のご了解を頂き何パーセントかを各校区に頂いて活動費に当てました。

六十年代になると、結婚式場などたくさん出来、衣装もそこで借りられる様になり、だんだん利用されなくなって、平成七年七月に今まで関わっていただいた方々に集まって頂き、この貸衣装制度を終わることにして、全ての衣装の即売会をし売上金は市の福祉に寄付しました。

婦人会の衣裳台帳

しかし農業を営まない家庭（消費者）と農業を営んでいる家庭（生産者）との間には食糧事情に大きな違いがありました。

一　消費者の生活

食糧難

飽食のこの時代に思い起こすことは、終戦間近な頃から戦後の食糧難時代の食生活です。

その頃、今のような食生活を誰が予想したことでしょう。

わたしの家は純消費者の家庭で、主食はすべて配給に頼らなければなりませんでした。

配給される米は少なく、少量の米をさつまいも、大根葉、芋づるなどでかさをふやし、味付けは塩味で箸の立たない雑炊ばかりでした。弁当を持って働きに行くわたしは、その雑炊をなるべく深い弁当箱に入れ、汁がこぼれないように持っていくのは大変でした。

箱膳にのった食事（戦時中）

ときにはその雑炊もなく二、三切れの蒸し芋（さつまいも）を新聞紙にくるんで持って行く日もありました。その弁当を見ていた学級の子どもが

「先生、また芋かあ」

と、のぞき込み、同情とも、あきれともつかない言葉を発し、自分の持って来た弁当の麦ご飯を

「これ、食べて」

と、弁当箱のふたにのせて持って来てくれました。しかしその子の僅かばかりのご飯をわけてもらうにしのびなく

「一口でいいよ」

と、一箸もらい、その心根に涙したことを今でも心に深く残っています。

ある時は、米の代わりに大豆が配給されたこともありました。

その大豆が雨の中、無蓋車（むがいしゃ）（屋根のない車）で運ばれて来て、現在の各務原郵便局の西辺りにあった農業倉庫の庭に山積みにされて雨にうたれたり、陽に当たったりして腐敗した豆もありました。そんな豆も一戸に割り当てられた定量の中に入って来ました。その豆をより分けて食べなければなりませんでした。

大豆は、米の調理の仕方と異なり煮るのに相当の時間がかかるのです。幸いわたしの家には圧力鍋があり、それで煮ると時間もかからず燃料も少なく柔らかく煮ることができるので近所の方々が豆と燃料を持って来て次々と炊いて帰られ、母が

「一日中豆を炊いていた」

などという日もありました。

その他、米に代わる色々なものを主食として食べましたが、一番食べられなかったのが、小糠（こぬか）入りの団子でした。少量の小麦粉に小糠を混ぜて団子にしてそのまま食べたり、フライパンで焼いて食べるのですが、どのように手を変えてみても、食後何がどのように作用するのかむかむかして食べがたいものでした。

そんな食糧難で毎日ひもじい思いをしていても、「勝つまではほしがりません」という一言に励まされた戦争の恐ろしさをつくづく思います。

この平和な時、物のあり余った時、このような経験をした者が少なくなっていき、平和の有り難さ大切さをどう伝えて行くべきかと思う昨今です。

この時代にはやった言葉に「タケノコ生活」があります。配給食料の圧倒的不足のため一般消費者は農家への買い出しをして補いました。しかし現金では売ってもらえず、衣服などとの物々交換が常識でした。嫁入りの時購入した大事な着物などと食料とを交換して生活しなければなりませんでした。一枚、一枚はいでいくということから誰いうともなく自嘲的に「タケノコ生活」だと云われました。

次も戦後の生活の一面を書かれた文を紹介します。

誰も知らない話

その情景を思い出しても決して不快感はなく、必死で家族を守る主婦の姿が浮かんできます。「女は逃げろ」と言われていたその頃は、米兵が進駐し不安な毎日でした。食べ盛りの子供を抱えた母親は配給だけでは足りず、畑に捨てられた大根、芋のつる、掘り捨てられた親指大のさつま芋等、食べられそうな道端の草なども食べていました。

見兼ねた父がどういう伝を頼ったか今は知る由もありませんが、進駐軍の食べ物というより残飯を分けてもらいました。人目につかない山の陰にトラックに積んだドラム缶1本がおろされます。ドラム缶からコンクリートの溝にあけられると、製品になっていないこねたばかりのメリケン粉の固まり（こうじ粕の様なのがついていてこれを洗う）ソーセージ等多分見たこともない食べ物がたくさんあったと思いますが、決して奪い合うこともなく珍しい物があると、歓声をあげて分け合いました。テレビで見る難民の人達のような暗い表情もなく、又そうした事を恥じらうこともなく家族がともに食べました。

こうした事がいつまで続いたかは分かりませんが、貧しい国の実状をテレビで見るにつけて、こうして戦後の人々が耐えて来たからこそ今があるのではないかと思います。現代の若者達に是非知ってもらいたいと痛切に感じます。

二　生産者の食生活

農家の食生活

大抵の農家は、宅地は広く庭には柿、いちじく、梅など実のなる木や茶の木をつくり竹藪には孟宗竹、真竹、淡竹などを育て、竹の子を長期間たのしめるよう考えて作られていました。母屋の南側は広く庭をとり収穫物を干したり脱穀に使うのに便利な「かど」がありました。

日当たりのよい場所には、家畜の飼育小屋が作られ、山羊、鶏、兎、豚などを飼育していました。

家のまわりの畑は、野菜畑になっており、四季折々の野菜の栽培がなされていました。

これらの環境は、先祖代々自給自足で安心して生活できるよう受け継がれてきたものです。

戦後間もない那加で

家族の健康を支える『食べること』はどの時代になっても大変な仕事でありますが、その頃は店も少なく八百屋菓子雑貨店、味噌醤油店などは地区にそれぞれ一軒ほどしかなく、肉を手に入れようとすると町の中心地まで出かけていかなければなりませんでした。その上、現金収入は少なく、倹約することが美徳の時代であったため、なるべく家でとれるもので食べることを考えていかなければなりませんでした。

わたしが育った家は、田が三反と畑が五、六反ありました。父が勤めに出ていましたので祖父母と母が中心になり農仕事をしていました。畑仕事は、野菜作りのほかに陸稲、その裏作に大麦、小麦を作っていました。農繁期は、どうしても子どもや他人の手を借りなければなりませんでした。

農業のきりまわしは、五十代の祖母が中心で、祖母や母は家にある材料を使って家族の健康を支える食生活をいかにしていったらよいかと頭を悩ましたことと思います。

以下、子どもの頃に食べたものを挙げてみます。

山羊乳

野菜くずや草で容易に育てられる山羊を飼育し、その山羊から乳を搾って飲みました。山羊乳は牛乳と比べますと味にくせがありますが、動物性蛋白質、カルシウム源の食品として重要視されていました。乳を搾る目的から雌山羊を飼い種付けの時は雄山羊のところまで連れて行き交尾させ、六ヶ月間で出産します。その後、乳を搾るのです。二、三頭の雌山羊を飼い、いつも乳が搾られるように考えられていました。

鶏の肉

祭り、正月など人が集まると家で飼っていた鶏が一羽犠牲になります。一羽つぶして肉をとり一番柔らかいささ身のところは霜降りに、その他は五目ご飯に入れたり、うま煮の材料に…と料理されます。最後に残った骨は、小さな石臼の上でよく叩いて団子にして油で揚げて骨まで食べてしまいます。

はぜきび

煎り豆専用のハゼキビというトウモロコシ、煎ると白い花を見るような美しい形になります。今でもポップコーンと言って親しまれています。

麦こがし（香煎）

裸麦を炒って石臼でひいてそれに砂糖を混ぜてなめます。粉々しているので食べにくい時は、お茶で練って食べます。香ばしい味がします。

いり豆

大豆を煎ってそのまま食べるか、固いので熱いうちに醤油につけたり、醤油砂糖につけたりして柔らかくしてから食べます。

あられ

正月の餅をつく時あられ作りをしました。餅米に粟を入れて蒸し、里芋をすり下ろして餅を搗きながら入れてのし餅にし、それをあられに切ります。里芋を入

石臼

れることによってふっくらと歯切れよく煎り上がります。

なべやき

うどん粉に塩と砂糖（あれば黒砂糖ならば上等）を入れてドロドロにかきまぜ、ほうろく（現在ならフライパン）で焼きます。油がしみこみおいしくいただけます。

切り干し

さつまいもをふかし五ミリぐらいの厚さに薄切りにし、むしろの上に並べて干します。九分通り干し上がったら、新わらを十センチぐらいの長さに切ったものの中に入れ、白い粉をふかせます。こうなると甘みが出てきます。

さつまいもの切り干し

やきいも

落ち葉でたき火をした後さやぬかを入れていぶし、さつまいもをまるごと入れてゆっくり焼きます。とてもおいしく焼き上がり上等のおやつです。

また、さつまいもを一センチほどに輪切りにしほうろくで焼き食べました。上等に作る時は、ころもをつけて油を多い目にして焼きます。

ぼたもち

農作業が終わってほっとした時、また雨が降って農作業ができない時はきまって手の込んだ家族の喜ぶようなものを作りました。大麦、小麦の収穫や脱穀、田植えが終わった七月一日は「農休み」といって農作業はしませんでした。

その日には決まってぼたもちを作って食べました。もち米とうるち米を合わせて炊き、すりこぎでつぶして餅状にしてまるめて餡やきな粉をつけます。ぼたもちは、農休みの時ばかりでなく、葬式やお彼岸、法事の時などにも作られました。もち米の代わりに里芋を使う場合もありました。

小田巻

手の込んだものの一つに小田巻があります。「きょうは、雨降りだから子供たちに小田巻でも焼いてやろう」と秋収穫した小豆を朝からコンロでことことと煮て午前中がかりで餡を作り、昼から小田巻を焼きます。ドロドロにこねた小麦粉を鉄板の上に木べらで薄くのばしその上に餡をのせ巻いて出来上がり。それを何本も作りました。当時、砂糖は配給であまりなかったので甘くはありませんでしたが、上等のおやつでした。時には、餡に替わってさつまいもを使うこともありました。

その他、行事に合わせて手の込んだものを作りました。

がんど葉餅

米の粉や小麦粉で皮を作り餡を入れさんきらの葉で包み蒸して食べました。

初午だんご

養蚕を行う地域では、初午に米の粉で繭の形のだんごを作り、観音様にお供えし、養蚕が失敗なくできるように祈りました。

主食

米は、貴重なもので白米のご飯は食べることができませんでした。普段は「半ばくめし」といって米と麦が一対一の割合で混ぜ合わせてあるものや、米と粟と麦とのものやさつまいもの入ったご飯をよく食べました。そのようなご飯を食べられるのならよい方で、芋粥やおじやなどもよく食べました。また、主食の代わりに煮麺（今の味噌煮込みうどん）を食べました。

そのほか

秋になると渋柿の皮をむいて軒下につるし、干し柿を作ったり、大根の切り干しや千切り干しなどを作り冬の常備食品としました。

また、収穫された根菜類（いも類、大根、ごぼう、人参、長芋など）は穴の中に入れて保存されました。

食べることは、人間生活の楽しみの一つであり、その頃の人たちは、ない食材をいかにうまく使って食べるか、又乏しい中にも食べることに楽しみを見出して来たと思います。わたし達の今ある体も幼き頃に食べた栄養が基盤になっていることを考えると先人の努力に感謝せずにはいられません。

いなごの佃煮

稲が色づき始めると、田にはいなごが見られるようになります。子供達は布袋の口に竹筒をつけた袋を持っていなご取りをします。

袋一杯になると、竹筒をとり袋の口をしっかりしばり、一晩そのままにしておきます。糞をすっかり排泄させるためです。

次の日あつく熱したほうろく鍋の中に、はねるいなごを入れゆっくりいためます。それから羽と足をとり、醤油で煮しめます。

上等なカルシウム源の食品として食卓にのぼりました。

貴重な食品たまご

どこの農家にも六～十羽ぐらいの鶏が飼育され、卵は貴重な動物性蛋白質源の食品として重宝されていました。

大抵は姑が卵の管理をし、許可を得なければ使用することは出来ませんでした。

お見舞いやご進物などに使用するときは、空き箱に籾殻を入れ割れないようにしました。栄養価が高く調理が簡単で、消化しやすいということから病人には適した食品でした。病気になると食べられるとか、遠足や上等の弁当の時とか当時では高級な食品でした。

第三節　住生活

一　戦前戦中の住生活

生活に必要な生活水、燃料の調達は住む環境によって違いがありました。

各務地区のような山に近い地域では、水が豊富で山から清水をひき飲料水にしたり、小川には豊富な水が流れているので、洗いものをしたり、物を冷やすのに使いました。

つるべ井戸

平地では家を建てるのに必ず井戸が必要でした。水はつるべで汲み上げていましたが、時代が進むにつれてポンプを利用するようになりました。

那加地区では、昭和十六年頃から水道事業を始める計画があったと「水道事業報告書」に記されています。

燃料は、薪、松ご、桑の木の株、炭、練炭、豆炭などを使用していました。農家の男性の冬の仕事に薪作りがありました。山や林から伐って来た木を切って割木に仕上げるのです。

女性は山へ出て松葉などの葉をかき集め、たきつけ用のたきものを作りました。また養蚕の盛んな地域では、桑の木の枝はたき付けに手頃なものでした。

暖房器具は、火鉢、炬燵（こたつ）、櫓炬燵（やぐらごたつ）を使用していました。

便所や風呂場は母屋と別棟に造るか、家の外から出入りできる家が多く、炊事場は土間にくどを築きそこで炊事を行いました。座敷や客間は広くとっても、女性の仕事場は粗末なものでした。

昭和十七年に「金属回収令」が出され、全ての不急品が回収されました。一般家庭では、門柱、門扉、手すり、傘立て、バケツ、置物、菓子器、鍋、釜、やかんなど衣食住の日常生活用品も供出しました。

本土が空襲を受けるようになると、敵機から目に付かないようにするために、土蔵や家の白壁はすべて黒く塗りつぶされました。

二　戦後の住生活

戦後しばらくは、戦中のような節約、倹約の生活が続き人々は貧しさに耐える生活をしました。その頃の生活を記した文章を紹介します。

戦後の生活

じっと目を閉じて戦後のことを思い出しますと、随分苦しかったことが一つ一つ浮かんで参ります。

子供は昭和十一年生まれの長女を頭に二十三年生まれの「おと子」まで全部で七人、次男と次女は病気と事故で亡くなりました。大勢の子供と借家住まいの生活でした。近所の家は大百姓ばかりです。

戦争も末期の頃は、家族は増えるし、食糧難にはなるしで、私は勿論子供たちもいつも空腹でした。

煮物の味付けに醤油が買えなくて、大根の下漬けの時にあがってくる塩水で代用したこともあります。

夫が大工に転職した時、一日の日当がさつま芋五貫目、約二十キロでした。それを貰ってきてくれた日は、有り難いと思い腹一杯食べて幸せをかみしめたものです。

その頃のわが家は板の間と、むしろを敷いた部屋でした。冬は雪が戸の隙間から入って、朝になると部屋の中にうっすらと積もっていたこともありました。

手は霜焼けや、あかぎれが絶えることなく、薬も貼るテープもなくいつも傷がむき出しで、黒い黒い手でした。

風呂はドラム缶で、水を四十センチ程入れて沸かしました。大勢入るので最後は真っ黒な水になっていました。特に三ツ池の土は黒く、衿などは一日で黒くなります。石鹸もなくたらいに溜めた水でこするだけなので汚れは落ちず、少ない水で濯（すす）ぐためタオルはいつも真っ黒でした。水は中小屋の航空廠の所まで貰いに行ったものです。ありあわせの容器をノーパンク（空気を入れないタイヤ）のリヤカーにのせこぼれないように注意しながらひいてきたものでした。

今思い出を書いていると、貧しいながらも楽しかった事のように思われます。現在が平和だからでしょう。三十歳くらいの人達が五十年後、平成の初めの頃の思い出はどんな風になるのかな…と、一人呟いています。

いつまでも平和でありますように願っています。

戦後の家事

わたしが各務原市に移り住んだのは昭和二十年十月です。

昭和二十年八月二日、焼夷弾爆撃による富山大空襲で富山市内は総なめ、焼け野原となり、縁故を頼って故郷を離れました。結婚をしたのは四年後のことで、後に聞き知ったことですが、「あそこの姑さんはどえらいえらまやで大変やね」と言われていました。両親と兄弟、わたしが嫁いできて八人家族の大所帯でした。

朝起きると三升釜に麦が三、米が七程のご飯を炊きます。今でこそ麦飯は健康食として見直されていますが、消化が早くお腹もすぐに空き、妹は「白いご飯だったらおかずはいらないよ」と言っていたことを思い出します。

野菜が一杯入った雑炊は食卓によくあがり、うどんや薩摩芋（さつまいも）、すいとん（小麦粉を水で練って汁の中で煮たもの）もすべてが代用食でした。この頃はまだまだ戦後の食糧難だったのです。

昭和二十年代前半の燃料は薪、炭、練炭などで、竈（かまど）はご飯を炊くところ、味噌汁などを煮るところ、茶釜をのせるところと三つ揃った大きな竈でした。火のつけ始めが難しく火吹竹を使って薪に火をつけました。焚きつけ用に近所の引き犬を借りて舅と須衛の奥山までリヤカーを引いて、杉や松の枯れ葉を拾いに行ったこともありました。

姑はお釜や鍋の底の煤をたわしでよく落としていました。煤を取るか取らないかで燃料が違うということです。わたしはこの仕事が厭（いや）でした。手は黒くなるし煤が頬に飛んでくるからです。

井戸からポンプで水を汲み上げていた頃、八人家族の洗濯は容易

かまどを使って炊事

なものではありません。姑と二人がかりで大たらいに洗濯物を浸し、洗濯板でごしごし洗うのですが、厚手の物となると手の皮がむけそうな思いです。厚手物の絞りは洗濯物の両方の先端を持ってねじりながら絞ります。大晦日ともなると、夜なべで洗濯をし、終わった頃に除夜の鐘の音を聞いたこともありました。

水道と家電製品の普及は、主婦にとって最高の喜びです。

昭和三十年代になると、技術革新がなされ、数々の新製品が大量生産されるようになりました。

これによって価格も低下し、その一方では国民所得が向上し、国民の生活は段々豊かになっていきました。

日本人が初めて生活革命を実現した時代でした。この革命は家庭における女性の生活に一大変革をもたらしました。

第六章　信仰と女性

第六章　信仰と女性

各務原市には、寺社が多く人々の信仰も厚く、昔から幾多の寺社を建立、維持し諸行事を守ってきました。

お薬師祭礼で（鵜沼南町）

旧各村は、全部の村が鎮守の神社を持っています。村の共同体的な慣行には信仰に関するものが少なくありませんが、その中心になったのが氏神信仰で、いわゆる鎮守の森の神社は、村人の精神生活の中心場所として保護崇敬されて規模を整えていきました。村人は生まれると宮参りの日を以てその氏子となり、農作業、雨乞い、除災など村民生活の重大事は、大小に関わりなく鎮守に祈願しました。村内大事の相談にもこの境内が選ばれることが多くありました。

また市内には、禅宗系諸寺や真宗諸寺が数多く建立されており、人々の信仰を集めて寺院関係の諸行事も多く行われています。そして祖先も大切にまつり、各家の仏壇も立派で家中の中心の最もよい場所に置かれています。祖先の法事などもしっかり行い、墓所も大事にし、常にお参りし掃除が行き届き、いつも供花が絶えません。

これらの神社の祭礼や、寺院の行事を表立って執り行うのは、男衆で女子衆はいつも後ろからそれを支えてきました。神を祀り寺を敬うことは人々の精神生活の中心でもあり、諸行事は皆が集いさまざまの交流があって楽しいことでした。人々が集まれば、世の中のこと農業生産のこと等々多くの情報交換が行われ、人々の協力があり、親しい交わりがありました。そしてその集まりには、必ず飲食が伴い、それは女子衆の仕事でした。女子衆は、家の内外をきれいに整えます。

仏壇や墓の守も女の大事な仕事で、朝夕に灯明を灯し、お水や御佛飯をあげ、多くの先祖の月命日にはお墓に参り、常にお墓を掃除し線香や供花を欠かしません。地蔵様や庚申様、馬頭観音の祠にも、いつも供花やお供えものが絶えないし、頭巾やよだれかけなどいつも女子衆の手で新しくされています。

このようにいつの時代でも女子衆は、陰で家を村を支えてきました。陰とはいえ女子衆の力は、人々の信仰の生活や行事を成立させるためにはなくてはならない大きな力であったのです。そして女子衆も陰で支える自分達の力を信じ誇りに思っていたのです。

観音講の集まり

「あしたはわたしんとこでおかんのこうをやりますでおまいりしてくんさい」と戸毎にお知らせに廻ります。観音講は毎月八日の夜、集落の女の人が集まって、西国三十三ヶ所御詠歌を唱え仏様にお参りする集まりです。戦前からずっと今も続いています。

宿元は家並みの順に廻ってきます。宿（当番）になると何日も前から屋敷（庭）の草引きをし、四八の座敷の襖を取り払いきれいに掃除をしておきます。当日は仏壇を調え、お膳に数々のお供えをします。夏は部屋を涼しくし、冬は暖かくして客を迎えます。仏壇と並びの床の間には

四国八十八ヶ所参りの御朱印の掛け軸を掛け、季節の生花を飾り、茶道の道具などもおいてあって主婦の腕の見せ所です。

日没になると厚い木の板（長年使い込んで真ん中が丸くへこんでいる）をたたきます。カン、カン、カンと集落中に響きます。二度目のカン、カン、カンが聞こえると、各家の女の人たちが、昔は提灯、今は懐中電灯を持って集まってきます。

みんなが集まると仏壇に灯をともし、庵主様のお経が始まります。庵主様が先導で座の者が後について御詠歌を鉦を叩きながら唱和します。この鉦やお経の本や鉦の座布団などみんな各家の姑さんから引き継ぎ、主婦になった時一家の代表でお参りに参加するのです。

御詠歌が一通り終わるとお茶の時間です。お茶菓子も出て歓談のひとときとなります。女の人の集まりですからお互いに遠慮なく話し合い笑い声がはじけて楽しい時間です。農作業のことや花作りの秘策、縫い物の工夫、珍しい御馳走の作り方や梅干しや漬け物の秘伝なども交換し合います。

寺まいり

私は昭和二十三年二十一歳の春に、西本願寺の門徒の農家に嫁いできました。婚家は御法義（仏教の教義）の厚い家でした。結婚式の翌日には、姑さんに連れられてお寺に行きました。良き嫁になることとご加護を阿弥陀様に御願いしました。

花まつりで

その時、姑さんからお寺や仏様、仏壇を大事に敬うこと、いつでもお数珠は忘れないこと、お寺まいりの作法など細かく教えられました。今でもその教えを守って、事あるごとにお寺まいりを欠かしたことがありません。子供の小さい時は子供を連れて、今は幼い孫を連れてお寺まいりをします。

毎年、大晦日には家族揃ってお寺に行き、除夜の鐘を突き、お経が終わるまでお参りします。わが家の年中行事の一つです。日々どんなに忙しくても、機会を逃さぬようにお寺に参り南無阿弥陀仏を称えることは心の安らぎです。

墓の守

私は明治四十五年の生まれです。十九歳で結婚し六人の子を産み育てきました。六十年余も連れ添った主人は八年前に亡くなりましたが、私は元気で畑をやっています。

私の家の墓は家から少し離れた所にありますが、手押し車を押して行けば行けるので、ほとんど一日おきくらいにお墓にお参りしています。

先祖代々のお墓は、ご先祖様が入っている大切なお墓です。主人に父、母、祖父、祖母、幼くして亡くなった弟と妹、私の小さい時可愛がってくれた曾祖父母そしてそのまた先祖の人々が眠っているのです。私が今日ここに在るのは先祖の方々のお陰です。先祖の墓をお守りしていくのは私の務めだと思います。

毎月の命日には必ずお参りして、草むしり、お墓の掃除、水、お花、線香をあげます。私だけでなくご近所の方はみんな同じようにお墓のお

守りをしています。

お墓に供える花は畑で育てています。四季折々の花を絶やさぬように色々の種類の花を育てています。花を育てるのは楽しみですし、お墓用の花を切り揃えてご近所にも配り喜んで貰っています。

私の母も祖母も代々女の人はこうしてお墓を大事に守ってきました。いつも「ご先祖様のお陰で今があるのだからお墓を大事にしなさい」と言われ続けました。また「お墓を綺麗(きれい)にし、お花を絶やさないのも女の仕事だから、草を生やしたり掃除を怠けてはいけないよ」とも云われて育ちました。嫁にも孫にもこの姿を見せて、お墓を大事に守っていってほしいと思います。

地蔵さんのよだれかけ

墓地やお寺に六地蔵さんが祀ってあり、道の辺々には馬頭観音や地蔵さまが祀ってあります。それらはいつもきれいに掃除がしてあり供花やお供えが絶えたことがありません。お地蔵さんには、きれいな頭巾やよだれかけが掛けてあり時々新しいものに変わっているのです。お墓にお参りする度に「あら、また変わっている」と思います。新しい頭巾とよだれかけを掛けてもらってお地蔵さんも嬉しそうです。

いつも頭巾やよだれかけを作って掛け替えているおばあさんを訪ねて聞いてみました。

私は小学校を出てから嫁に行くまで、家の農業を手伝いながら本家のねえさまの所へお針を習いに行きました。そこには私くらいの女の子が大勢習いに来ていました。お針のお師匠さんは大変厳しく、縫うことは勿論、挨拶の仕方から行儀作法まで仕込まれました。お陰様で小さな肌じゅばんから高価なたれ物まで縫うことが出来るようになりました。また芝居の衣裳まで縫うことが出来ます。

昔は家中の人の一年中に着るもの一切主婦が縫い通して調えたものです。農業の合間に夜なべ仕事をし、特に冬の間の仕事はいつも縫い物でした。人からも頼まれて縫うことも多く、長年そうした縫い物をする度に出る端切れをとっておいたので、色々な端切れがたくさんあります。

お地蔵さんのよだれかけは、おばあさんも母親も姑さんも作っては掛けに行くのをいつも見ていました。そして、「お地蔵さんは子供の仏様で子供を護ってくれる仏様だ」と云われています。自分の子供もよその子供も護ってくださいと思って作り続けてきました。辻の観音様も常に掃除をして花を供える母や祖母や姑の姿を見てきて私も続けています。このように頭巾やよだれかけを作って掛けに行くと気持ちが良く楽しみです。

お地蔵様にお参りをする

地蔵祭

私の家の近くに辻堂がありお地蔵様が祀ってありました。

暑い八月二十四日がお祭りの日でした。お地蔵様は子供を護る仏様で、子供と母親が主役のお祭りです。

昼のうちに地蔵堂には、果物やお菓子、餅などが山のようにお供えしてありました。そして近くの杉の木から椿の木まで縄を張り、紅白のほうづき提灯が四、五十個も下げられて昼間から飾り立ててありました。

私たちは子供心に早く夜が来ればいいなと思っていると、何処からともなく沢山の子供が集まってきました。あちらでは縄跳び、こちらではお手玉遊びと子供たちがたむろしてお祭り気分を十分味わっていたものです。

さて夜になると今日ばかりは早めに夕食を済ませて、浴衣に着替えた子供たちが集まってきます。もうその頃には地蔵堂の前の「南無地蔵菩薩」と書いた大提灯には、赤々と灯が入り大人の人たちが大勢来て高く張ってある「ほうづき提灯」の縄をゆるめ、次々に灯をともしていきます。あたりはぱっと明るくなり紅白の提灯が風に揺れ動く有様は夏祭りならではの風情でした。

やがてカランカランと甲高くカンカラ太鼓の合図に読経が始まります。お経が終わるのを待って子供達は一列に並んでお供えをいただきます。それが子供たちにとって何よりの喜びでした。

この日は母と子が一緒に連れだって来ます。この日ばかりは日頃忙しい女の人も家事を忘れ、さっぱりと着替えて子供を連れてお参りし母子共に楽しみます。

地蔵盆の準備

また、地蔵盆といって子供達の集まりをする地区もあります。

「山の子様」は男子だけのものですが、この地蔵祭は男女共同のものです。まずお祭りの前日子供たちは、自分の町内を「お地蔵様のほうがん」と叫びながら家々を廻りその頃のことですから、二、三十銭ずつもらってきました。それを翌日宿元に持ち寄って上級生が買い物の相談をします。当日は昼食をみんなで食べますので、宿元のお母さんも相談に加わり御馳走や買い物のアドバイスをします。

お地蔵様はお宮の一隅に台座共四、五十センチ位の石仏で、ひっそりと立っています。当日子供たちは、周りの草を引いたり小笹を刈ったりします。両側の花筒に花が飾られ掃除がすむと、宿元で出来た小豆御飯を供えて一同揃ってお参りします。

いよいよ昼食ですが、これまた大変なもので宿元は朝からひっくり返るような大騒ぎです。昼食の用意は宿元のお母さんがします。大きい子が手伝いますが、主になって作るのは宿元のお母さんです。前日の準備から当日の御馳走作りから後片付けまでそれは大変な仕事です。御馳走は小豆御飯か味御飯に味噌汁、南瓜や茄子の煮物、胡瓜の酢もみなどです。子供たちはみんな何遍もおかわりしてお腹が一杯になるまで食べたものです。食後は大きい子たちがお菓子を分けたり、西瓜を切ったりして小さい子をいたわりました。

このように農家は、いろいろな宿元が何時まわってきてもすぐ引き受けることが出来るように、日頃から用意をしていました。大勢の人の食事を作るための炊事用具や食器や材料など、準備怠りなく用意していました。これらのことは農家の主婦の甲斐性でもありました。

庚申様のご馳走

どこの地区でも同じでしょうが、各務地区でも昭和二十年代までは、信仰上の集まりや生産組織の集まりなど、多くの村の行事があり、その都度村中が集まり会食をしていました。それらの一例として「庚申様」の時の食事を調べてみました。

毎年、十二月十七日は「庚申様」の集まりがあります。今では、お経があがって屋敷の者が一軒に一名ずつお参りするだけですが、昭和二十六年頃までは、夕食から始まりました。

その年の宿（当番）の家に米や野菜が集められ、当番の内輪の女子衆が昼過ぎから、エプロン掛けで集まり食事を作りました。

献立は

・五目めし　人参、ごぼう、油揚げ、とり
（炊き込みでなく具を御飯に混ぜる。）
・味噌汁　大根、とふ（豆腐）、赤味噌
・煮付け　こんにゃく、角麩、油揚げ、じいも（里芋）
・おしたし　正月菜、白菜
・つけもの　たくあん
・丸揚げ

がつくこともありました。

宿になった家では、四八の部屋を開け放し食事が行われました。食事には、子供達も付いて行き、屋敷中集まって大勢でおよばれをしました。

食事が終わると、車座になって連絡事項や世間話などをしました。

お茶が出て、お茶うけは、

・もち花のあられ
・野菜のおしたし
・つけもの

などでした。

子供達にとって「庚申様のおよばれ」はとても楽しみなものでした。大釜（はそり）で炊いた五目めしは大変おいしくて、何回もお代わりをしてお腹いっぱいいただきました。あの味は忘れられないと五十代以上の人は言います。

庚申さま

その昔は、庚申待ちと言って「かのえさる」の夜、一晩中眠らずに青面金剛の神を祀ったそうです。その間に食事をしたようです。

十二月はすぐに次の行事があり、二十一日には「冬至弘法様」が行われました。

・昼は「ぼたもち」
・夜は「五目めし」

昼に餅まきをする屋敷もありました。

今は、宿の家で餅を搗きお供えし、弘法碑の前でお経があがり、その後お参りした者にお餅が配られます。

日頃、あまり娯楽のなかった頃、そして日常の食事の粗末だった時代、こうした行事に伴って皆で食事をすることは、最大の楽しみだったのでしょう。同時に大切な情報交換の場でもあったのです。だんだん食事の回数も少なくなり、集まる機会も減少してきていることは淋しいことです。

参考文献

「各務原市民の戦時体験」（各務原市戦時記録編集委員会編　各務原市　一九九六）

「各務原市民の戦時記録」（各務原市戦時記録編集委員会編　各務原市　一九九九）

「各務原市史　考古・民俗編　民俗」（各務原市教育委員会編　各務原市　一九八五）

「那加町史」（小林義徳著　龍文堂　一九六四）

「不惕百年」（稲羽東小学校同窓会　新潮印刷　一九七三）

「ふるさとの行事（美濃と飛騨）」（岐阜県小中校長会　西濃印刷　一九九九）

「美濃生活絵巻　上・中・下」（高橋余一著　図書刊行所　一九九〇）

調査協力者及び資料提供者（敬称略）

赤座　香　赤座　栄　赤座すみ江　浅野志げを　浅野　たね　浅野　好子　足立　郁子
足立　恒子　足立　秀成　安積千枝子　飯沼　貞子　石黒　光子　石田チハル　磯野さかえ
磯野　時子　伊藤　つう　稲葉　葉子　宇野尹久子　梅田みさ子　大島イトミ　太田　はな
太田美代子　大堀　若枝　小川貴美子　小川　泰信　奥村佐賀見　小倉三千子　尾関　久子
小野木浩二　北原　豊子　木俣　一勢　国定　里子　栗田すま子　黒田　ちえ　小島　清子
五島　伍一　小島　静江　小島寿美子　小島　テイ　五島　久子　五島　芳子　後藤　英子
小林　金枝　小林　静子　小林瑠璃子　坂井　幸　酒井美節子　左高あきえ　左高　宣子
澤田　聡子　澤田とみの　武山　米子　田中あきえ　玉木　裕　丹間れい子　永井紀美子
中川美知子　長瀬まつ子　長縄はつえ　浜中好美　広瀬きぬ　広瀬富美恵　水野　比奈
宮崎ゆき子　武藤　貞子　森　きみ　森　寿子　横山　くに　米山みちえ

調査・執筆委員（敬称略）

赤座　栄　足立　秀成　磯野　時子　宇野尹久子　小野木浩二　栗田すま子　小島　静江
小林瑠璃子　後藤　英子　左高　宣子　澤田　聡子　玉木　裕　永井紀美子　森　きみ
米山みちえ

編集後記

各務原市歴史民俗資料館では、毎年「資料調査報告書」を作成し頒布してまいりました。その数は、昨年度までに二十五号となっております。今回は、各務原市女性史の会のご協力によって「かかみ野の女性たち」を発刊することになりました。女性史の会は、そもそも戦中戦後において市内の女性たちがどんな思いで日々を暮らし、どんな体験をしてきたかを記録集としてまとめ、後世に伝えていこうという趣旨のもとで発足したと伺っております。小林瑠璃子会長をはじめ会員の皆さんの熱心な活動によって多くの方々から手記が寄せられ、内容的にも戦中・戦後はもちろんのこと、戦前の大正・明治の時代にまで記述が及んでいるものも多くありました。こうした手記を有効に活かしたいという願いから、女性の立場から各務原市の歴史を見てみようという本調査報告書作成の運びとなったわけです。

私たちは、近世・近代の女性というと、男尊女卑の風潮の中で心身共に苦しい生活を強いられてきたのではないかというイメージをもってしまいます。しかし、本書を読んでいくと、周りの男性と対等に渡り合う姿が見られたり女性がいなければ祭にしても法事にしても何も進まないという自負心が伺えたりします。また、家族の幸せを一心に願って神仏を信仰する姿や自分自身の教養を高めようと努力する姿が見られます。そうした記述には時代時代を懸命に生きた女性たちの様々な思いが表れており「かかみ野の女性たち」の本当の姿を伝えてくれるものとなりました。

最後になりましたが、本調査報告書作成にあたってご協力いただいた委員の皆様をはじめ、貴重な資料をお寄せくださった全ての皆様に心より感謝の意を表します。

平成十四年三月

各務原市歴史民俗資料館
館長　小川和正

各務原市資料調査報告書第26号
かかみ野の女性たち
平成14年3月15日

編集発行　各務原市歴史民俗資料館
岐阜県各務原市鵜沼三ツ池町6丁目329番地
電話(0583)70-9661
郵便振替　00850-0-731　各務原市
印　　刷　エース印刷株式会社

Kakamigahara

名古屋市図書館
111983854